

前戸内遺跡・西屋敷遺跡 発掘調査成果見学会資料

平成21年6月13日(土) 蔵王町教育委員会

調査要項

遺 跡 名	①前戸内遺跡 (まえとうちいせき) ②西屋敷遺跡 (にしやしきいせき)
所 在 地	①蔵王町大字小村崎字前戸内ほか ②蔵王町大字小村崎字西屋敷ほか
調査期間	平成21年4月29日～8月31日(予定)
調査面積	約7,042㎡
調査原因	県営ほ場整備事業(円田2期地区)
調査主体	蔵王町教育委員会
調査指導	宮城県教育庁文化財保護課
調査協力	宮城県大河原地方振興事務所 蔵王町土地改良区

県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要

蔵王町教育委員会では、県営ほ場整備事業の区画整理工事に伴い、平成15年度から事業用地内の遺跡の発掘調査を行なってきました。

これまでの調査で、十郎田遺跡では周囲を材木堀で区画した飛鳥時代(約1,350年前)の集落跡が、六角遺跡では奈良時代初め(約1,300年前)の集落跡などが発見されています。



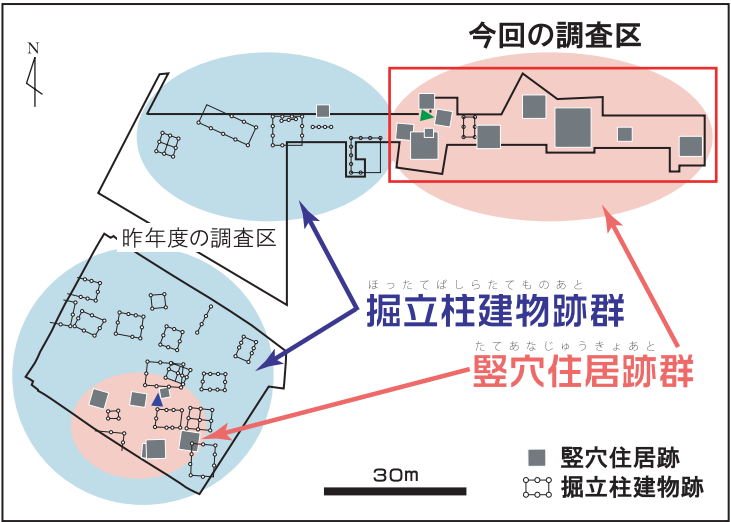
今回調査を実施している前戸内遺跡・西屋敷遺跡は、円田盆地の北西部にあります。西屋敷遺跡の南東部には中世の領主の居館と考えられている西小屋館跡が位置しており、東側に隣接する戸ノ内遺跡では中世～近世の屋敷跡などが見つかっています。

前戸内遺跡 平安時代の拠点的な集落跡または豪族の居宅跡か？

平安時代前半頃(今から約1,200～1,000年前)の竪穴住居跡10軒などがせまい範囲にまとまって見つかりました。住居内からは当時の食器類(土師器・須恵器)や鉄製の鎌、砥石などが出土しています。

昨年度調査した西側の調査区では、ほぼ同じ頃に使われた掘立柱建物跡19棟、竪穴住居跡6軒などが見つかっています。建物跡には大きな柱穴をもつ主屋と推定されるものや、床を支える柱をもつ倉庫と考えられるものがあります。

当時の庶民の住まいは竪穴住居が一般的だったことから、前戸内遺跡は普通の集落とは異なり、この地域でも中心的な役割をもった集落あるいは地域の有力者(豪族)の住まいであった可能性が考えられます。

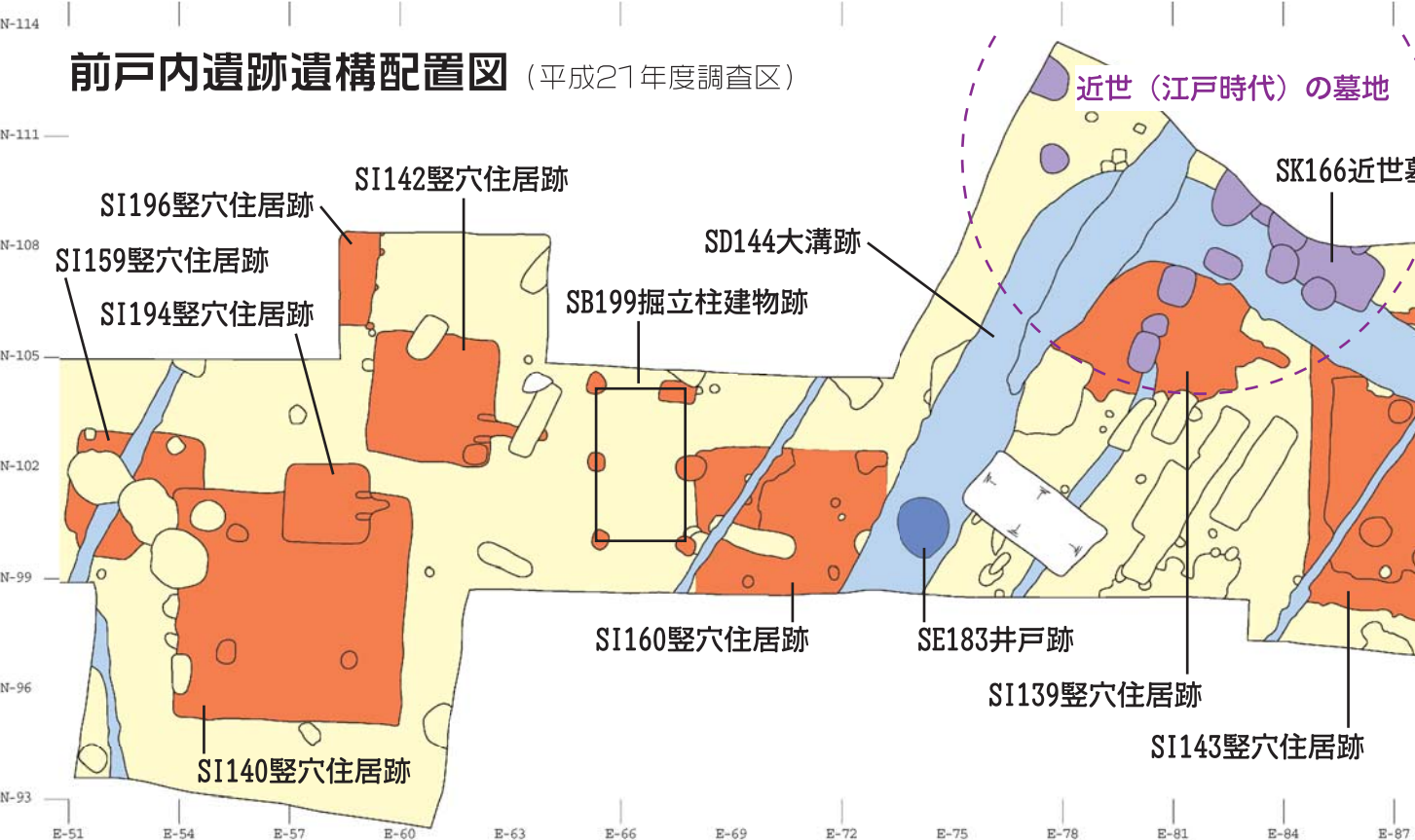


竪穴住居跡 (SI142、右上の図の▲の位置から撮影) 一辺が3.2mほどの小型のもので、東側に煮炊きをするカマドが作られています。土師器や須恵器の杯(つき、皿のような形の食器)が多く出土しました。

掘立柱建物跡 (SB10、右上の図の▲の位置から撮影) 東西3間(7.7m)、南北2間(4.9m)の大きさで、柱を立てるために掘られた方形の穴は一辺64～88cmと大きく、主屋など中心的な建物であったと考えられます。



竪穴住居跡の調査 地層の断面を観察するための畦(あぜ)を残して少しずつ注意深く掘り下げていきます。





柱穴跡の調査 現在の畑の土を取り除いた後の地面を注意深く観察して昔の柱穴や溝などの跡を探します。



柱穴跡の調査 見つけた穴の半分を掘り下げて断面を観察し、深さや土の特徴などを図面に記録します。

西屋敷遺跡遺構配置図（右図の■の調査区）



※溝跡の掘り直し
SD 6 溝跡・SD 5 溝跡→SD 4 a 溝跡→SD 4 b 溝跡→SD 7 溝跡

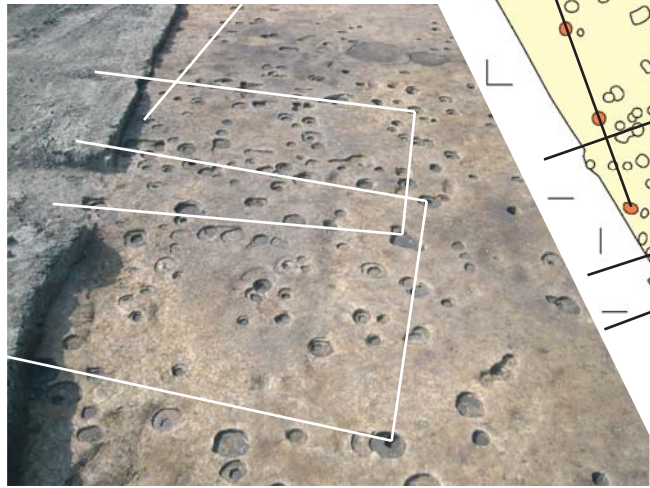
西屋敷遺跡 西小屋館の主と密接な関わりを持つ人物の屋敷跡か？

中世(鎌倉～戦国時代、約800～400年前)頃とみられる大溝跡と、掘立柱建物跡群が見つかりました。大溝は幅1.7～2.7mほどで、位置を変えながら5回掘りなおされていました。最も北側に位置するSD4溝跡は、東西約40m、南北約80m以上の方形の区画を形成しています。掘立柱建物跡群は溝による区画の内部に集中しています。多数の柱穴跡が密集し、何度も繰り返し建物が建てられたことが分かります。

今回見つかった溝による区画は、中世のこの地域を治めた領主の居館と考えられる西小屋館跡を囲む土塁の西辺に接してつくられていることから、西小屋館の主と密接な関わりを持つ人物の屋敷地だった可能性が考えられます。



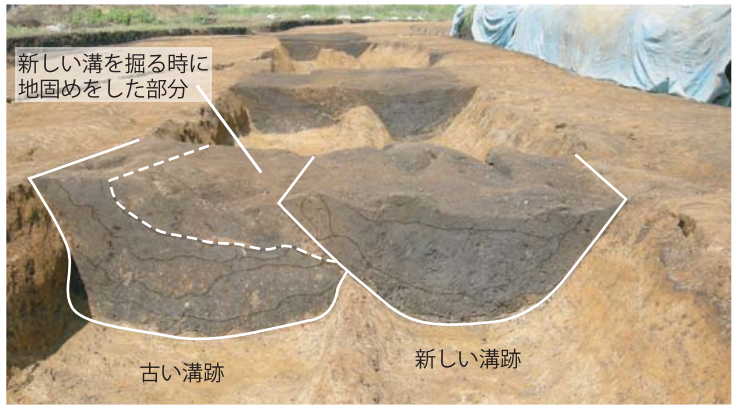
発見された大溝跡（上の図の▲の位置から撮影） SD 4 溝跡は西小屋館跡(正面奥の杉木立のところ)の西辺から40mほど西へのびたところで南へ曲がっていました。



掘立柱建物跡群（上の図の▲の位置から撮影） 無数の柱穴跡が密集して見つかりました。掘立柱建物を何度も繰り返し建て替えていることが分かります。



西小屋館跡と調査区（→上の図の▲の位置から撮影）



大溝跡の土層断面（上の図の▲の位置から撮影）



柱穴跡の土層断面（上の図の▲の位置から撮影）